大発見

アラビアの石油に賭けた男たち

ウォーレス・ステグナー著　工藤宜訳

DISCOVERY!

著者略歴
Wallace Stegner（ウォーレス・ステグナー）
アメリカ、アイオワ州出身。
ノース・ダコタ、モンタナ、ネバダなど移動、
教職のかたわら評論活動に入り、
資源レポーターとして活躍。
著作に『キャンデー・マウンテンの岩塊』
『オール・ザ・リトル・リブ・シングス』
『マウンテン・ウォーターの響き』など。
いずれも風土、自然環境と人間の営みを
生き生きと描いている。

●

訳者略歴
工藤　宜（くどう・よろし）
一九二九年山形県に生まれる。
東京大学教養学部教養学科卒業後、
一九五三年朝日新聞社に入社。
『週刊朝日』『アサヒグラフ』編集部を経、
朝日新聞特別企画「世界名作の旅」担当、
『週刊朝日』編集長を経て
一九六二年～六四年ニューヨーク駐在、
現在出版局長付。

大発見――アラビアの石油に賭けた男たち

昭和51年12月20日　第1刷発行
著者　ウォーレス・ステグナー
訳者　工藤　宜
翻訳協力　アラビア石油株式会社
発行者　小石原　昭
発行所　株式会社 ばら出版
東京都港区元赤坂1-4-2　知性ビル
郵便番号・107
電話・東京（〇三）四〇三―六四六一
発売元　株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号・112
電話・東京（〇三）九四五―一一一一
振替口座・東京三九三〇
印刷所　共同印刷株式会社

1200円

検印廃止　PRINTED IN JAPAN
定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はおとりかえします。　（学2）

大発見

——アラビアの石油に賭けた男たち

AN
EXPORT
BOOK

Library of Congress Catalog No.
74–148026

All Rights Reserved

Printed by
Middle East Export Press, Inc.
Beirut, Lebanon
First Printing, January, 1971

DISCOVERY by Wallace Stegner
Copyright © 1971 by Wallace Stegner
Japanese translation rights arranged
through Brandt & Brandt, New York
and Charles E. Tuttle Co., Inc., Tokyo

DISCOVERY!

The Search for Arabian Oil

By Wallace Stegner

Japanese translation

By Yoroshi Kudo

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

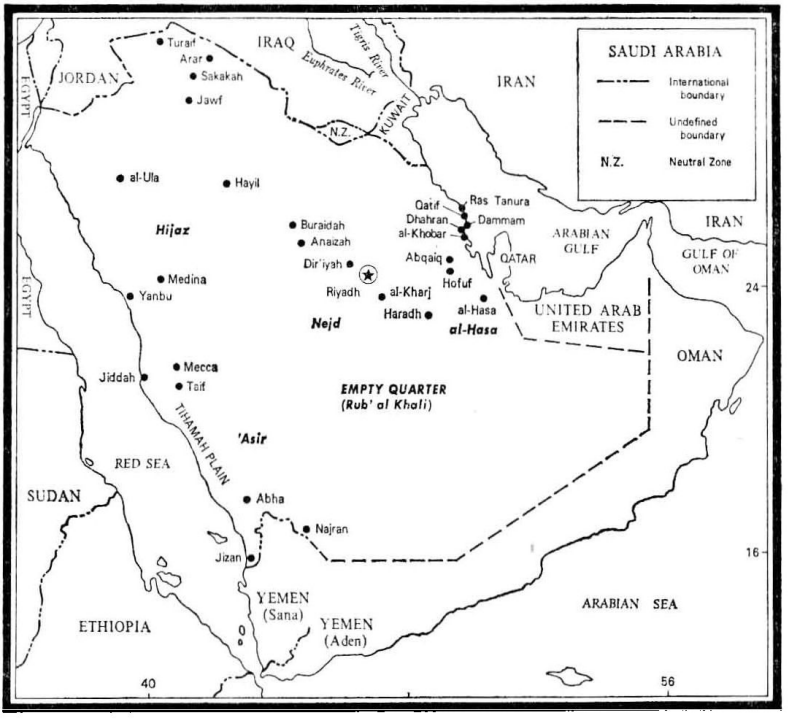
1 接触のはじまり——9
2 決定的な曲がり角——25
3 橋頭堡——37
4 飛行機が来た——53
5 十人の先駆者——65
6 掘り屋は一騎当千——89
7 期待のダンマン第七号井——113
8 待ちに待った生産開始——133

9 頑張る第二軍——157
10 あの油井の火を消せ——177
11 助けを呼ぶブッチ——193
12 空襲！——209
13 百人衆の時代——229
14 七夫人のご帰還——241
訳者あとがき

カバー写真　渡部雄吉
装幀　麹谷　宏

大発見

——アラビアの石油に賭けた男たち


SAUDI ARABIA
International boundary
Undefined boundary
N.Z. Neutral Zone
IRAQ
IRAN
JORDAN
EGYPT
KUWAIT
N.Z.
Euphrates River
Tigris River
Turaif
Arar
Sakakah
Jawf
al-Ula
Hayil
Hijaz
Buraidah
Anaizah
Dir'iyah
Riyadh
al-Kharj
Haradh
Nejd
Medina
Yanbu
Mecca
Taif
Jiddah
TIHAMAH PLAIN
'Asir
RED SEA
SUDAN
Abha
Najran
Jizan
YEMEN (Sana)
YEMEN (Aden)
ETHIOPIA
EMPTY QUARTER (Rub' al Khali)
Qatif
Ras Tanura
Dhahran
Dammam
al-Khobar
Abqaiq
Hofuf
al-Hasa
al-Hasa
QATAR
ARABIAN GULF
GULF OF OMAN
UNITED ARAB EMIRATES
OMAN
ARABIAN SEA
24
16
40
56

1 接触のはじまり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一九三三年二月十五日、タローディー号という船が、アラビア半島の西岸、紅海に面するジッダに着いた。

眼前にひろがる景色は、アラビア以外の何物でもなかった。ジッダは西暦六四八年からメッカに通ずる港である。芝居の書割りのような丘を背にして、砂以外に何もない海岸に、よろよろと突っ立っているような港町なのだが、ここは、わずか四十マイル東方の予言者生誕地に巡礼する数百万の信徒が、最初に目にする土地でもあった。

当時の古い町なかは、両側の家の壁が、道を二匹のロバがやっと通れる程度にせばめており、風雨にさらされ、ひずんだ彫りのある家々のバルコニーは、お互いにほとんどくっついていた。尖塔はあぶなっかしげに傾き、町全体が、紅海の珊瑚質の砂の中に沈んでいく地盤の上で、たるんで、だらしなく立っていた。

過去千三百年にわたる巡礼の中でもっとも信仰深い者も、反対にどんな侵略者も、この町を変えはしなかった。紀元前二四年にやってきたローマ人も、一五四一年に攻撃したポルトガル軍も、一八五八年にも砲撃を加えたイギリス軍も。

そして、一九二五年十二月、紅海に沿ったアラビア半島の北部、ヘジャズ地方の制圧を完成した、イブン・サウドとして知られているアブドル・アジズ・イブン・アブドル・ラハマン・アル・ファイサル・アル・サウドでさえ、支配者一族の追放以外は、この市に対してほとんど何の変革も加えようとしなかった。

彼は、秩序を回復すると、聖地巡礼ができるかどうか心配していたモスレム諸国の指導者たちに安全の保証を与え、諸外国からサウド王国の承認をとりつける仕事に専念した。ジッダのちっぽけな外国人租界は、それまで通り存続することを許された。

この租界は、イブン・サウドが統治するサウジアラビア全土の中で、非モスレムの住む唯一の避難所だった。

そこの人々は、アラビアの慣習やワハブ宗派の政府の戒律に合せて暮し方を変えていた。しかし、気分がいいとはいえないので、つい西欧風の楽しみにふけってしまうのだった。見つからないように注意して写真をとったり、ラジオや蓄音機を音量を下げてそっと聴いたり、領事館などで煙草を吸ったり、そうできるときにはいっぱいやったりしていたのである。

腐敗を一掃するのに熱心だった勧善懲悪委員会も、ジッダでのこの種の外交特権を許容していたから、こうした政府の配慮のお返しに、租界側も用心深くふるまった。彼らの大部分は、イギリス人とオランダ人だったが、だれも事態をぶちこわす人はいなかった。つまりジッダの外人租界は、アラビアそのものと同様に、変革などにちっとも関心を持たなかったというわけである。

ところが、いま、タローディー号で着いたのは、なみの巡礼者ではなかった。これまでにない変化が、しわくちゃの白服を着、ヘルメットをかぶってやってきたといっていい。変化が、ロイド・N・ハミルトンという名前の、髪をきれいにそったアメリカの実業家の姿を借りてやってきたのだ。

ハミルトンは、ソーカルの略称で知られるカリフォルニア・スタンダード石油会社の弁護士で、借地契約の専門家だった。妻のエアリーをともなっていた。

彼らの同行者は、イブン・サウドとの交渉担当（コンタクト・マン）であるカールとノーナのトゥイッチェル夫妻で、二人ともアラビア半島のことなら何でも知っている数少ないアメリカ人だった。そして、ジッダではもう一人の人間、やはりサウド王との交渉担当になるハリー・セントジョン・B・フィルビーが、心待ちにしているはずだった。

ちょっとした手違いで交渉担当が二人もできてしまったのだが、これがソーカルのためには、かえって幸いする。ソーカルの社運をいい方向に変えた偶然的な事件がいくつかあるが、これもその一つである。

アメリカの一私企業がアラビア半島に人を送りこむには、長い時間が必要だった。ハミルトン一行の話をつづける前に、この地域の石油にまつわる歴史を、ざっとなぞってみよう。そうすれば、一人でもよさそうな交渉担当が、なぜ二人になったかの事情も、おのずと明らかになろうというものだ。

何世代にもわたって、大英帝国は、政治的、商業的優位を紅海とペルシャ湾（アラビア諸国ではアラビア湾と呼ぶ）に保持してきたが、湾の東、南部一帯の海岸では、帆船（ドウ）に乗った海賊が英国の商船を襲った。英国海軍がそれを平定した後、英国代表部は、各首長に条約を押しつけた。

それは実際上はともかく、条文の上では内政に関して独立を認める代り、外交問題では大英帝

国に権限を委譲する、というものだった。

こうして、クエート、バハレイン、カタールの各首長、休戦海岸の小首長、部族長らは、条約の定めにより、海賊行為をやめ、英国から、毎年補助金を受けとるお返しに、英国代表のいうことはたいていきくようになった。

代表的なのは、一八九二年にアブダビの首長が署名した条約である。首長、その嗣子、後継者は、英国以外の国と協定を結んだり、文書を交換してはならず、英国の特別の同意のない限り、英国以外の国の代表者あるいは代理人の国内居住を許さず、英国の同意なくして、その領土の寸土たりとも売却、譲渡、抵当権設定、いかなる利権の設定も認めない、というものだった。

さらに英国は、当時の中東で重要な産油国だったイランとイラクに、どっかりと腰をすえていた。イランのアバダンにあるアングロ・パーシアン石油会社は、英国海軍に燃料を供給する契約を結んでいたが、同社の株式の過半数は、一九一四年以来、英国政府の握るところとなっていた。英国の産業界と外交政策の間には、切っても切れない関係があったのである。要するに、事実上この両者は一つのものであり、石油会社は英国の国策を代表する公然たる機関だった。

一方、イラクにはイラク石油会社があった。多くの会社が、株主としてこの会社に参加していた。アメリカの会社が共同で所有していた近東開発会社も株主で、持株比率は二三・七五パーセントだった。

これに対して英国の持分は、アングロ・パーシアン石油会社の分を含む英国単独で持っている

株に、英国がオランダと共同で持っている株を合せると、その二倍だった。これで見ても、イラク石油会社に対する英国の影響力の強さが分るが、その上、同社は英国の高等弁務官並びにバグダッド、モスール、バスラにいる駐在官の監視、保護、積極的協力のもとに操業したのだから、その影響力は強力無比だった。

一九二八年、イラク石油の株を持つ会社は、いわゆる「赤線協定」で自分自身をしばった。この協定は、加盟各社が旧オットマン帝国領内で、単独で石油を採掘し、開発することを禁じたものである。

こうした一連の手段で、イラク石油とアングロ・パーシアン・グループ以外の石油会社は、この地域では手も足も出なくされた。

唯一の例外がアラビア半島だった。何しろサウド王は大きすぎて、さすがの英国も手に余った。彼はイフワンの名で恐れられたイスラム同胞団の軍をひきいて、ヘジャズ地方のシャリフ・フセインをアラビア半島から追いだして、キプロス島に亡命を余儀なくさせ、半島で無敵の地位を築いた。一九二七年にはジッダ条約を結んで、英国に完全な主権を認めさせた。

第三の石油地帯であるはずのこの国からは、まだ石油が産出されていなかった。半島の東側にはバハレイン島があり、天然真珠がとれることで知られていた。ロンドンの投資家グループは、イースタン・アンド・ゼネラル・シンジケートという会社を設立して、湾岸での投資活動を推進しており、バハレイン島にも事務所を構えていた。

もちろん石油にも関心を持っていた。やろうとしていた業務は、利権のブローカー、つまり利権獲得のために石油会社の代理として、利権供与国と交渉するとか、先に自ら利権を獲得してから、これを石油会社に譲渡するとかの仕事だった。

このシンジケートのバハレイン島代表は、フランク・ホームズ少佐といい、ニュージーランド出身の陽気な元軍人だった。彼は石油の夢につかれて、イブン・サウドに拝謁し、とうとうサウジアラビアの東部地域のアル・ハサ六万平方マイルの石油採鉱利権を獲得した。その席には在イラク英国高等弁務官パーシー・コックス卿がいて、そんなことをされてはアングロ・パーシアン・グループの利益が阻害されると考えたものだから、「時期尚早でございます」と露骨に反対したが、無駄だった。一九二二年のことである。

さらに一九二五年には、バハレイン島の石油利権が英国の承認のもとに、バハレインの首長からホームズに許可され、一九二七年にシンジケートは利権供与選択権をイースタン・ガルフ・オイル社に譲り渡した。

ところが、ホームズ少佐がせっかく手がけたこの二つの利権は、二つながら世話のやけるものになってしまったのである。

まずアル・ハサの利権は、口をかけたヨーロッパやアメリカの石油会社の全部からそっぽを向かれてしまった。この地方に油田開発に必要な道路、輸送機関、通信施設、熟練した労働力、資材供給設備等々がまったくない上、外国人も巡礼期以外にはほとんどやってこないというなじみ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com